

# サニーベールのあんず畑

坂口立考

横長の綿雲が群をなし、空低くゆるやかに移動する。その空に向かって垂直にのびた赤い枝の先に、小さな白い花がひとつ、太陽の光に向かってしっかりと咲いている。あたりの空気はまだ冷たいけれど、淡い春の光に安心して、枝の中に蓄えていた手持ちの力が湧き出てきたかのようなうだ。その存在感到誘われて私は土の中に足を踏み入れた。柔らかい花びらに顔を近づけると微かに甘い香りがする。梅の花によく似ている。でも、梅ではない。この夏、どつしりと腰をすえたような太い幹に支えられた空間に、土と光と空気の恵みを集めて、独特の甘みを備えた柔らかい橙色の実を結ぶ。アプリコット。いま、家のすぐ近くにあんず畑の中にいる。

昨夏、六年あまり住んだメンロパークから、隣の隣の町サニーベールへ引っ越した。車で十五分くらいだが、南東に下って気温も少し上がり、より太陽に近づいた感じがする。大学に進学する息子が家を出て大学の寮に移り住むのを機に、生活の場を一新した。需要に比べて供給量の限られた住宅事情を反映して新しい借家を短期間で探すのは厄介だったが、運よく静かな集合住宅に新居を定めるこ

とができた。そこは偶然にも、長年妻が通っていた陶芸スタジオのすぐ近くであった。そこから道路をはさんで反対側の大きな一画すべてが果樹園で、そのほとんどがあんずの畑である。

青い空が絶えないカリフォルニアという土地柄とはいえ、初春は曇る日もあれば小雨も降る。週末には、山の辺のトレイルを歩くことにしているのだが、天気の様子が微妙にうつろう春先は近所の平地を歩くのも悪くない。まだ葉が芽吹く前のあんず畑の佇まいは静かで、木のオブジェが並んでいるかのように簡素だ。全体を遮るものがないから、畑のいちばん奥まで見通すことができる。あんずの樹の足元を囲むようにして生えた菜の花がそよ風に揺れている。すこし低めの樹に近づき、背伸びして枝の先を覗き込むと、思っていたよりたくさんの赤い蕾が待機しているのがわかる。先頭グループで咲いた花の後続となろうとしてか、いくつかの蕾は折りたたまれた白い花弁の端が内側からチラリと顔を覗かせている。昨夏、引越したばかりのわれわれを迎えてくれたのは、この畑のあんずの絶妙な味わいだった。取り立てのあんずをひと箱、毎日続けて食べた。あんずといえば、ドライフルーツのアプリコットのほうが馴染み深かったのだが、この香りと味わいは密かな発見であった。なるほど、サニーベールとは「陽だまりの谷間地帯」という意味だったのだということであらためて思い出した。

スペイン語の地名の多いカリフォルニアにあって、サニーベール (Sunnyvale) はシンプルな英語名のひとつだ。先住インディアン of 古い地名にせよ、後から入って来た人たちの命名した地名にせよ、地形・風景に関わる単純な命名法は万国共通のように思われる。たとえば、サニーベールに隣接する街の名前。パロ・アルト (Palo Alto) は、高い木 (セコイヤの木のこと)、ロス・アルトス (Los Altos)

も同じく、高い木々。マウンテン・ビュー (Mountain View) は山景色。確かに、晴れた日には湾の向こうに乾いた土の山脈がくっきりと見える。一方、サンタ・クララ (Santa Clara)、クパチーノ (Cupertino)、サンノゼ (San Jose) といった地名は、カトリックの聖人にちなんだ命名。地形・風景でなければ、人名。これもまた、地名の典型パターンのひとつだろう。

ひと昔前、サニーベールは果樹園地帯であった。もともとは先住インディアン・オローニ族が居住していたが、スペイン人の入植時代をへて、十九世紀中頃に、アメリカ東部・中部からの移住がはじまった。街の南側の山はぶどう畑の丘陵があり、ワイン醸造は今でも盛んである。平地を果樹農園が占め、ドライフルーツの生産、果物の缶詰工場も立ち並んだ。果樹を中心として地元産業の発展に加えて、二十世紀中頃からは、コンピュータを中心とする先端技術・産業が勃興し、いまや世界の先進産業の集まる土地、「シリコンバレー」へと変遷した。半導体の主原料であるシリコンとは、コンピュータの身体のようなもの。サニーベール「陽だまりの谷間」という素朴な名前から着想して、今度は「シリコンバレー」(コンピュータ産業の谷間地帯) と呼ばれるようになったのだろう。

ところで、ベールもバレーも谷間という意味だが、日本でいう山と山の間の狭い地帯という谷のイメージとはだいぶちがう。鳥瞰図で見れば一目瞭然だが、サンフランシスコ湾は内陸を細長くえぐって南北に広がっている。長さは六十キロ、幅が最長十五キロもあり、えぐられて残った地形が細長い半島を形成している。その半島が東側は太平洋ぞいの山脈、西は湾を隔てて内陸の山脈とのあいだに挟まれている。谷間には違いないが、イメージとしては底の平らな器か、用紙トレイのような形といったらよいだろうか。地元の生活では、実はシリコンバレーということばは使われない。この地域全

体は「バイエリア」（サンフランシスコ湾地帯）、シリコンバレーの本体である用紙トレイ地帯は、文字どおり、「ペニンストラ」（半島）とも呼ばれる。

シリコンということばに象徴されるコンピュータ・ハイテク産業だけでなく、幅広い先端技術の研究や学問教育も盛んである。とはいっても、山にのぼってあたりを見下ろすと、大半は乾いた土色と濃い緑色に覆われて、高いビルもあまり見当たらない。いまでも全体の雰囲気は果樹農園的である。歴史の傍で住宅地の一面に存在をとどめたこのあんず畑からすぐのところ、アップルという名前のコンピュータ企業もあるが、それは果樹園からコンピュータという歴史の証というよりは、いまでも果樹園的な風情を残していることの証だという気がする。

このあんず畑を営む農家の施設に隣接して、サニールサニールの郷土史博物館がある。土地の開拓・街の建設はマーフイー一家の移住に始まるが、彼らの生活遺品から地元産業の歴史を証言する品々が展示されている。建物の外に、果樹農園の歴史を物語るパネル展示があった。その中に、古い写真を引き伸ばした目の粗い画像が一枚、私の目を惹きつけた。それは農園作業に従事する日系移民家族の、わずかな休憩のひとコマであろうと思われる写真だった。その日その時の光の様子と空気がありありと感じられる。別のパネルには、この地にやってきた移民家族による果樹農園コミュニティの名簿リストがあった。イタリア系の名前、スペイン系の名前などに混じって日系の名前も散見された。

明治時代に日本から果樹園農民として移住してきた人たちの氏名。それらは数音節のことばの、小さな断片だが、それだけである想像を掻き立てる重要な素材になる。彼らは、果物を上手に育てる心と熟練技術を携え、海を渡って異国の地にやってきたのだらう。労働も生活も苦勞は絶えなかったで

あろうが、その中でも、この陽だまりの土壌で芳醇な果物をたくさん実らせる工夫と苦心の中に新しいアイディアを培ったに違いない。その中にはカリフォルニアのフルーツ産業発展に大きく貢献するものもあつたかもしれない。ふるさとから遠く離れ、永住した新天地の労働の中に、それまでとは違った時間の深まり方を感じる事ができたのではないだろうか。

勝手な想像かもしれない。しかし、想像のほうが自由にかけ巡るのである。それは私の頭の中だけで起きているできごとではなくて、いまこのときの空気のふれあいの中で起きている。何もないところから突然脈絡なく、想像なるものが出てくるのではない。場という触媒によって想像が生まれ、ゆるやかな響きが連続して、想像がこの身に感じられる。共鳴するものがある時、じぶんの中に備わっていた響きの相手になるものが備わっていることに気がつく。それは私の手持ちの力。いまというこの場・この時の中にそっと現れるもの。五感がともにうまく働いて、すぐ周りの空気全体を含めた、「じぶん」という身近土壌に染み込むような、ゆるやかな時間がある時に、その実感が生まれる。いま私の「じぶん」は、彼らと同じ土の上を歩き、同じ光に包まれ、同じ空気に触れて、夏に実るあんなの柔らかな手触りと、独特な風味を思い浮かべている。いまというこのひとときの、じぶんを取り巻く空気が「想像の回路」なのだ。

ただ頭の中で考える、ということとは、そもそもできないと思う。どんな時であれ、じぶんを包む空気の中で、何かとふれあう。内なる響きが感じられ、後からそれが内なることばに写され、紡ぎ直され、知らないうちに何度も繰り返されている。その全体過程が「思ったり考えたり」していることの

はずだが、ふだんは「思考」だけが切り離されてあるかのように錯覚している。想像はじぶんという「ふるまいの世界」の中にある。私とは、「じぶんという風土」全体のことなのだと思う。

果物を育てるということは、土の手入れをし、水を遣り、光と空気に気を配り、あとは自然のなりゆきに委ねることである。静かに待つこと、ともに歩むことである。何かが結実するとは、その路ができるようにしむけること、そのための手助けをすることである。じぶんという存在もまた養われ、培われる風土そのものだと思う。それは「私」という自意識以前の、じぶん固有環境自体が育つことである。それは直線的な、過ぎゆく時間ではなくて、螺旋の上昇のような、あるいは深まる回路のような時間だろう。じぶんという風土の時間。それは、「私」という意識の中だけにあるのではなく、自分という身体の中だけにあるのではない。

その小さな博物館をあとにして、もう一度、あんず畑の端の土を踏んでから家に戻る。この不思議な感覚は何だろう。ひとつだけ言えることは、愛らしい白い花びらから連なるようにして生まれいたものだということ。この「あんず畑」が、じぶんという風土の情緒なのだ。心の外縁といったらよいのかもしれない。心の外縁？すると、どこからともなく、ガチョウ家族が現れてきた。道路をのんびりと斜めに横切り、みなこぞってあんず畑に入ってきた。畑の端にできた水たまりで大胆に水をのむ者、草の根をほじくるようにして、地中の虫を吸い出す者。思わず、その食欲旺盛な仕草を観察しているうちに、スウェーデンのマルメに暮らしていた時によくあちこちの道路で出くわしたガチョウたちのことが鮮明に思い出されてきた。それもまた、あんず畑という心の外縁である。

